



貞丈雜記

七



73
6188
7



7 3
明曾持
6188
夕

真丈雜記卷之七

膳部之部目錄

- 一 合子之事
- 一 折之事
- 一 衝重之事
- 一 木具之事
- 一 折敷
- 一 加んちりけ
- 一 折敷 角不切 側折敷
- 一 煙草盆之事
- 一 土籠之事 ハヤ条
- 一 三方四方之事
- 一 足付
- 一 片木
- 一 角 角 罎
- 一 三方四方を用ゐる人品之事

雜記七

目一



一菓子盆之事

一ふち高之事

一重箱之事

一箸の臺 圖

一饗之膳

一三峯尖 ニヶ赤

一盛形之圖

一活てうし之事

一飯櫃之事

一白木膳之事

一ちやげの事

一むき折お

一瓜さし

一甲立之事 ニヶ赤 圖

一高杯之事

一行器之事

一活てうし之事

一飯ヒ之事

一白木の事

一破子さくえの事

一塗椀之事

一油か蒸の事

一土器之代磁器用之事

一活鯉取扱之事

一心葉の事

一高盛之事

一かきまの事

一懸盤の事

一藻か塩分之事

一様子之事

酒盃之部

一献之事

一ニッ盃之事

一おろえくそく之事

一塗盃之事

一婚禮盃の事

一五宮盃先後之事

- 一 世このる
- 一 徳利の事
- 一 鉈子提子蝶形付る
- 一 祝言之瓶子ニヶ条の事
- 一 鉈子之柄包むる
- 一 筒之酒
- 一 さく九こんのる
- 一 さく一樽ニヶ条のる
- 一 押物のる
- 一 三ツ星五ツ星ニヶ条のる
- 一 酒の中強ニヶ条のる
- 一 柳樽の事
- 一 瓶子置換ニヶ条のる
- 一 鉈子提子山松柄付る
- 一 鉈子片口両口ニヶ条のる
- 一 高臺ニヶ条のる
- 一 法通ニヶ条のる
- 一 内ニヶ条のる
- 一 盆臺
- 一 ひとけ物

一 折の物

- 一 鉈子の柄ある星のる
- 一 勸盃の事
- 一 盃うらぬせある
- 一 削り花の事
- 一 拳固の事
- 一 太鼓樽の事
- 一 食籠物
- 一 殿中ニヶ条一献
- 一 白酒黒酒のる
- 一 さい越酌の事
- 一 鉈子蓋あるる
- 一 酒瓶の前ニヶ条のる
- 一 唐瓶子の事

輿類之部

一 輿四品有之の事

雜記七

一 棹主輿の事

目三

- 一 四方輿之事 固
- 一 みせきぬ之事
- 一 輿のゆをんの事
- 一 今世ぶぐえぎりの事
- 一 籠の輿之事
- 一 車兵輿乗るの事
- 一 一てーての事
- 一 ちよくまんの事
- 一 塵取之事 固
- 一 輿の下簾 固
- 一 女輿金物之次才
- 一 きて世の事
- 一 今世糸物駕籠の事
- 一 糸物と云る
- 一 黄色輿之事
- 一 輿基之事
- 一 檳榔毛車之事

以上

貞丈雜記卷之七

伊勢貞友 同
 千賀春城 同
 門人 岡田光大 校

膳部之部 此部飲食之部ト合セ
見ニシ慮丁方ノ並モ入

一 合子ガタンとも合器ゴトとも云ハ腕の事之才とあるを合を教ふるを合
 合器を五葩と書て免くらん汁挽平皿つ不さくこく言る
 五也と云说何也あやうく平皿は平皿こく言るの古
 古免くらん汁けんたるも平皿平皿まじりげ物の代り
 考はばはさつ不深き口け物の代り古口け物を用

雜記七

とキレト云ハ本マ
 キテ入物ヲ作り免
 故ノ名キルビヒキレ
 ハヒキ入レト云ラ略シ
 タルナルベシ則合子
 ノ一ノ職人各歌合
 ヒキレウリノ詞ニ
 イナハカウシテ
 名

今の平きうつがきりの廻りも細き筋を言く付るハらげ物
 ほうろく成入るるをす祿うつろくハ細き輪を今を今と云物
 何らけの中はらげ物の輪を基形を今をす祿これを今物
 奉式の膳部ハ皆白木とて食物ハらげはもをてらげ物の
 上ハらげをすも也食物のあらよりて白木乃らげ
 物もこそは
 ぬをこ盆と云物系殿將軍の時代ハありて寛永年中
 南蠻國インバシヨクより渡りしとこれ灰日記煙草盆のあら今世
 乃ありしと貴人の法前とハぬをを吸ふぬを襦とす
 ちある事あり

三年二月一
 七日所方所
 能有貴殿ヨリ由
 進上折三合六
 寸六角云目記
 六角二折らげ
 ころもあり

折と云ハ木を折らげて箱もろの折と云足を折らある折
 付る事ハあり折は合せて基をして毛不足を付る也あら
 釘クキしてお付る事あり臺もろの上ハ水引を付けて結ぶ
 磯川記云折ハ三献め五献めより糸ゆる可然ハ官立献數
 少き時ハ二献めより糸ゆるその折ハ著ハす折
 肉もろの折きくきく物ありを著を
 又折禱よりす折
 水引して折を結ぶと云今折と云ハ折は木不足をお付
 ぶを折らて木削ケズをあらの上はさきハ是ハ古ハ折と
 いたずら櫃物ヒツモノと云也折は金らん腹子ハ川と云
 今折一合と云

雜記七

二

折櫃物トツケ
 テ云時ニハアリ
 ウツモノト云也

奈々問書云三光
の圖は小ぢうへそを
らけを云又膳敷の
圖にて一合と云と云
小ぢうのり

海人藻芥云鍾へ
イカウ二度入三度
入置也然三近代簡
物五度入意見如
鐘々上器合出米

忌也山
三三度

三三度

折二乃乃車と心得る人何りあるより之折はカハラケ唐櫃

あども一合と云ハ一つのりへすて第飯をハ一合二合と云へ

一 土瓶品くのり小きをこぢうカハラケ飯をゆけのりへ小ぢうより云

ありを二と入と云三と入より大ありを大ぢうと云小ぢう小料

しる名也さて又三と入より大ぢう以下三まがりはく大き

大ぢうより三より大ありを五と入と云五と入より三より大

ありを七と入と云七より九度入十一度入十三と入十五と入を

何れも三廻まぐ大き十五度入より上小大ありハかき五と

入七と入より上段大ありハ酒わりの付肴をわけて出す時

用る之舊記ハけりけ物と肴ハ此車之前云云をハけ

のりを小ぢうと云ハ三度入の内より小き土器ある故なり

三度入ハ五より用るのりけ之酒ハ五より三度入ハ五より五より

土器を二と入と云大ぢうハ三度入の外より重なり大あり故大重

と云五と入ハ三と入より大ありを五と入と云七と入と云九度入ハ

下も同じより三と入五と入ハ五と入と云五と入ハありより

随々大きなる也三度入と云ハ本づき名付しる名あり

一 そくびと云うけけり式膳敷記ハ大ぢうより但そくびと云

かきけり然云貞衡云そくびと云うけ有ハ大サハいやくた

く種何也灰布うろく肴の陽用 肴あどわると出せ

より少る哉と云ふよりふと一 おそしとハおさまるん

一 魚のうらと云々魚記云は通里の貴人の内前一召 平高也北上記云へい

小きうらけ也ふの 平高也北上記云へい

記して平平 平高也北上記云へい

べと云々魚魚 平高也北上記云へい

むけて二上 平高也北上記云へい

高く来入神は供物をとりてなる平高也北上記云へい

小壺手壺と云阿阿 平高也北上記云へい

此圖ハ神道類 平高也北上記云へい

名目抄ニアリ 平高也北上記云へい

此手壺といふお魚魚 平高也北上記云へい

平高也北上記云へい 平高也北上記云へい

ども平壺ある 平高也北上記云へい

平高也北上記云へい 平高也北上記云へい

一 白うらけと云白く焼き 平高也北上記云へい

焼まどい 平高也北上記云へい

あさい 平高也北上記云へい

どう 平高也北上記云へい

是は 平高也北上記云へい

またす 平高也北上記云へい

何り 平高也北上記云へい

一 平高也北上記云へい

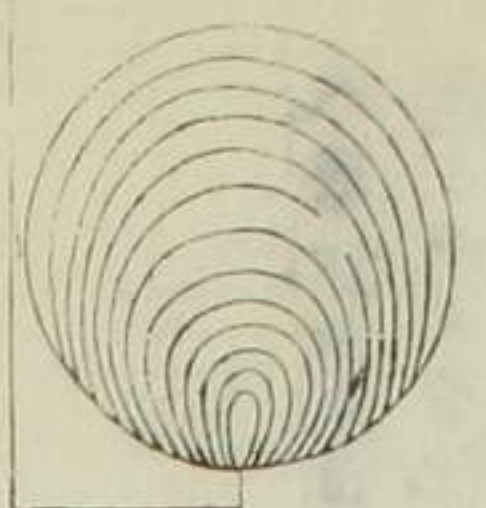
まろ 平高也北上記云へい

雑記七

人唐記云魚道疑
濁ト云又台記四節
八座抄云疑濁云
本名キヤウキト云

疑

ロ



如此所を公ねり
とあり云

供養ノ事ヲ公卿ト
書タル書モ有供養
本字也

カキイロ
ヨロツタシナシキ
を書きとりたる物ノ萬者記云云云の物とヤも云々入此
事人ノ是ハ勝の討ハ表ハ不此物と云女中むきうを必おされハ
一尺けつらうある物といハ敷中まても云々或云云ぬ物ハ
毛うの物ノ畧云々是ハ漆ぬりを云

一 土器のひねりとの多酌英記云云けは砂梅りともて堅可
必筋有り軍陳門出ると云ひねりとのを前(あ)して酒のまぬ
物云々云々筋ありとい云は物あると云云玉蕊の底可
うづまきのぬくも筋あり片はき(雲)ある所をひねりとも云
一 法いふ云々ハ衝重と書て三方四方供養の想名へ皆付いふ
也上の臺と下の是とをつまみまたる物ありつら梅云云

三方ノ穴を何けるを三方と云四方ノ穴を何けるを四方と云
穴をすもあけきを供養と云此之品ハ何れも同一形あり
足付ハ御堂の形は何れも

一 三方四方の下はあける穴を今ハくまると云古ハけん志あり
と云げん志ありをあくと云上臈名之記は見(た)りけん
志ありとハ眼像と書て眼ハ目也目といハ何れも目ノ像
といハ事ノ引目猪の目と云目の字も皆穴の事と云同志之
一 木具と云は云て檜の木ハ白木見作るも臺も皆木具也
三方四方供養も木具之物も今ハ足付の多斗を木具と云
足付ヲ足付とも云折敷ハ足をお付する所ハ足付の折敷

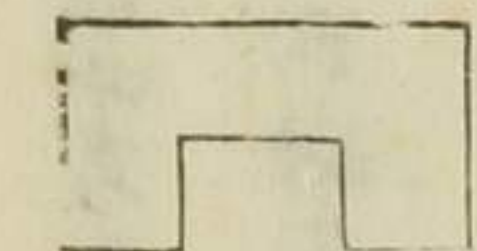
一 せしむるを畧して足付足打もど云々

一 折敷フシキと云ハ足あきを云ハ足付のものを折敷といふ事と何れ
足付の折敷ありぬ折敷も云あり

一 面ぎシ云ハ板をうすく厚さする俵けつぎシ作る折敷を云
一 めんちシのけ又シふうけとも云ハ面ぎシする板のめんちシをうけて
うろくシげつぎシを作る折敷を云

管の角カク名色々
有ナ此名
雜壳葉末抄出

一 角カクの折敷とも又角カクとむらりも云ハ四角の角を切りシる折
敷の事と云



足の形ハ此法今ナあり
折敷シの足付シるを
足付シと云今ハ是也

一 小角コカクと云ハ右の角の折敷を三寸四方ありシ多く中角ハ五寸

四方ありシ多く大角と云ハ八寸四方也是を八寸とも云

一 平折敷と云ハ四角の角を切りシる四角のも也足ハ是角
の折敷のこも足付シるも云ハ用ハ依シる

一 角切りカクと云ハ平折敷の多く東山殿年中折シる管カク鎮シり
引渡カクと云ハ事ありぬシ見シる

一 こそ折敷と云ハ角切りカクする足ハ入りぬシまきを云

一 今折ハ年始シる小量位無官のいシき考シあると蓋紙三方
は乃シる風俗シありシ古ハ三方ハ平人の用日物シありシ蓋
ハ折敷又ハ層シのせシるシ取シ記シ主人シの在シる

二 光院内府記云
蓋紙三方ハ大臣以
上ハ四方大納言
以下ハ三方也撰
家ハ不依シ官自
知少於公界被用
四方侯為一人

第一向名別ノ事
ハ於此清華ノ諸
流於公界可用四
方之由被存於曾
以無其謂所詮於
事申御相伴之時
清華之大中納言
自前々三方ニ相
定リハ六争於
公界可被用四方
乎諸家更ニ不可
免之事也於私宅
者大臣之孫子進
ハ用四方ハ是堅
固内々ノ儀ハ如
老内儀之時四
受用理運事ニ疾
若如此之儀被思
疾テ清華之衆
被及異儀哉ト
推量矣細線之三
方ハ六位職合用
之ハ公界衆會之
時此私之官女

盃を持つて出候之南の折衷の盃を分りたりと有り
是平人の三方を用ざる故也此之盃の盃は
人の位を付て定法有り奉り問はる公方攝掾大臣
且ハ盃盃四方は此の大方の公家流ハ三方は此の武家
角の折衷は此の大臣ある公家武家ハ此の時ハ此
又云相伴の人より膳の替り殿中も公方攝掾大臣門
此四方公卿ハ此方攝掾大臣門此の武家の位を付たハ此
配膳も後奏して殿上人位ハ此の武家の位相伴の時ハ公方攝
此亦四方公卿ハ此方攝掾大臣門此の武家の位を付たハ此
此の付の時に公方攝掾も此のときハ此の折衷ハ此の長也同也

上流分人用細線
殿上人四位五位位
奉會之時三方勿論
也

○細線ノ三方分薄
盤ト云三方ノ儀
ヒキヲシタル也
元來菓子ハフキタ
カニ見テ本式也貞
順記ニ云菓子金
ニ菓子ハルハ略儀
ハ見エ古ヨリ菓子
也アリ也

活配膳喝會寺^{おんま}所成の時多ク云々是を以て平人三方を用也
車あやまりあはれと被知る

菓子金と云古ハ菓子ハ此の言ハ盛也此の言ハ白本なり
又まんぢうらんあどハ^{まんぢうらん}らんらんらんらん
すくまんぢうらんあどを扱はる也菓子金近代の物

ちやづと云車京極大草紙の茶まんばのおき所ちやづの中
とありちやづといふハ益の事今も尾州家ハ菓子
盆の車をちやづといふあり

ちやづハ婦人言の折衷と云物ハ折衷のちやづを言ふと云る物
菓子あどをもちる為ハちやづを言ふと云るハ大さハ此の四方

重箱古ヨリアリ
也貞順色々之記ニ
重箱ト云一アリ大
永天文此書ニ書
ナリ室町殿ノ比ナリ
此物ナレハ表向ニ六
出ガレ物也又節用
集ニ重箱見テ

一 婦ちをさ一寸五分をとり角切角廻り棧スミキリカタを入る
一 むぎ折麦と云ハひや麦ひ麦をゆる折おこ又せいりりとも
云はるちやち高をききゆる物也今ハ切をむきむ麦の
類を挽又ハ皿ハ丸家入

一 今ノ重箱といふ物ハ古ノむぎ折麦を学ひたる物成テ古
重箱といふ物ハ菓子肴などの類を皆折よむをさる物
猿床のぶんざうと云キマヤケ狂言ハ宿坊うら重の四ガ系りま
うと云ハハ狂言ハ室町殿の代作りたる狂言也ハあるべし
亦後ハ作りたる狂言あり也
一 尻を系りすりふりやをさるて系りすりふり系り固書

紫式部日記の
さき所あいかさ
らるる所一の
あいかさ
兼盛系はれし
のあいあるが
きのためてよ云

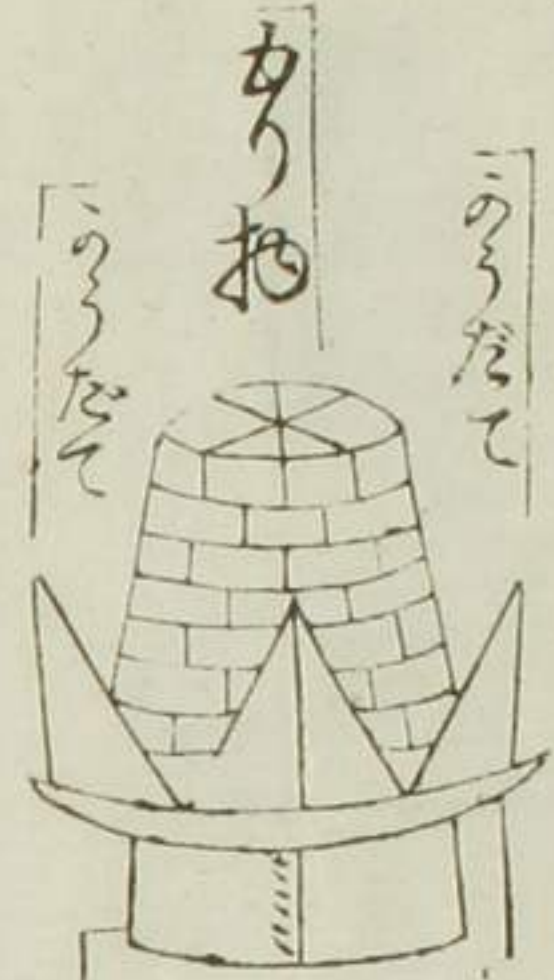
一 箸の臺と云ハさしつけの串七五三などの膳まで式正
の膳ハ必みくろつけは箸をおく也
一 流よこえと云り 此ハウリト書テ和名抄ウのめる
倍ハフリと書ハ何やまり
一 箸の臺と云ハさしつけの串七五三などの膳まで式正
の膳ハ必みくろつけは箸をおく也



箸の臺耳うらはさしつけ
箸の臺耳うらはさしつけ
長く形あり

一 甲立と云ハ七五三の膳まで式正の膳ハ必みくろつけは箸をおく也
いささけあはれり物の廻り紙を折紙をさるる有

持の折取を甲立と云也折形ハ庖丁の家の流よりて遠く
 見ハ奉名ハ饗立ふれどもゆうだてといひあやまりて甲立と
 書之折取をいふ多し




甲立

甲立の形をいふ者
 此類乃ち和と知るべし

手かけの折り紙
 にはあご甲立
 をするハかりお
 のこられ居る
 ぬよし居るま
 いかさるまの
 折り紙と云ふ

- 一 饗立を以て食物の傍とするハ上古食物を柏の葉ハ盛
 てるよりて柏の葉を表して紙を折てかりおをいふ事一
- 一 餐の膳と云ハ飯ハ餐立をする也一餐の膳と云く
- 一 考のつぎと云ハ食物をかりおゆうけのつぎに己げおの輪を並べて
 云也付きと云ハ塚の字之上蓋茶碗をいふ類を並べて付きと

云也ゆうけのつぎハ輪を並べて塚を高くするあたはつきと
 つぎ大草流の書ハ式三献の折取ゆうけといふハ右の土蓋の
 下は己げ物を置く也今付  ぬはる物をもて作り
 て高塚と云ゆうけの下に己げおの輪を並べて置くといふ
 形をもあびて作をいふもの

一 三峯尖ハゆうけのつぎにあり宗五火双紙は見えり又三儀一統
 ハ鏡子ハありとあり鏡子とハうまの辨く

一 三方膳と旧記ハ書ゆうけのつぎにあり三峰尖の事く
 一行器を古き書ハ外居と書るも何れ東鑑三十四云或ハ
 街重外居等屋圖為事云ハ江家次第ニ云大臣外大餐

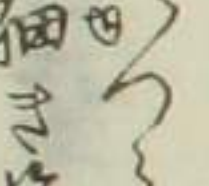
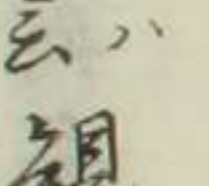
行器固包結記
 ニテリ可見合

一規式の膳形は白木を用ひ何事も土器を盛るるは一
切不用ひて用ひ終て後おこしを捨てるれを二度用ひ
これハ神國の風格を清浄を貴ぶ及之神代ハか
ぶふもあつて食おを拍の葉よりくることされ膳形を
かゝるとも此故とや傳へり後世もあつて白木の膳土
器などを金銀のももて茶み彩色をもをすハおこり小
して白木土器を用ひ奉意を取らざる者也

一破子ハコさくえと云ハり子ハ白木を拵の如く作りぬせが
しる并高き之形丸くも四角三角も扇形も拵風
流はも也ぬせがまてやま身も同一深さも故も方同

しりあるを以て子を子と名付くやありあるをぬす白木
を拵り一度切まうけ流しりあるくさくえと云ハ弁の箇々
酒を入れて持て在行を云表体は切つてを両方置て上の
はあかをつけ酒を入る弁ハ葉の枝ある前よりえと云

一今時の漆椀スリの円まこだうとて ぬせある物あり是ハ
の下ハ輪を並べる形を作りける者又つ不さうとて ぬせ
ある物あり又ひらうとて ぬせある物ありはつ不さう平さう

と云おこりげ物の形をうけ作りける廻りの細き筋ハ己げ
物よりつるを入る物 細き筋を云 視式の膳ハ食物を盛る器
よりの又物よりてハ白木の己げ物よりぬせ土器の下ハ輪

を考也漆碗の具も正刑をうりて作りし物大い
 さす焼真ぶとをもち奉りも大いありけし蓋さくねを略
 したる物也

一飯を盛る^{メシ}器は此も奉親式の時^{タカモリ}の器は飯をもちけし蓋さくねを言
 へされ飯の器^{メシ}は盛るも今時祝の時^{メシ}の器は飯を
 盛るも此も碗の器は飯をもちけし蓋さくねを
 及ざるも視式の膳の何れも土器はわが土器は此も
 物も食相多く今ぬ飯は限らず何れも皆言ありけ
 ざる物^{メシ}は盛るも此も碗の器は飯をもちけし蓋さくねを
 梳るも蓋さくねも物多くけ

一手箸^{シヨウモツ}上古の木を尚用はし削りて用ひし先^{テツ}は鉄

今の事考之字拾遺物語^{ヒキツ子}云用繩^{ウツ}をの包丁^{ウツ}は信ん

ひてすまむ^{サヤ}を削る刀^{サヤ}ぬいすまむ^{サヤ}は信ん^{サヤ}

右の如く上古の器^{ノギ}は削り先^{ノギ}の器^{ノギ}をもちけし蓋さくねを

右の如く上古の器^{ノギ}は削り先^{ノギ}の器^{ノギ}をもちけし蓋さくねを

草流はさかばの器^{ノギ}は削り先^{ノギ}の器^{ノギ}をもちけし蓋さくねを

ら入ひさしさをかけずと他流のごとく鉄を長くし

たを箸のさき入さしさをかけずと他流のごとく鉄を長くし

一膳^{デン}を上古の器^{ノギ}は削り先^{ノギ}の器^{ノギ}をもちけし蓋さくねを

ら入ひさしさをかけずと他流のごとく鉄を長くし

酒^{カサ}を上古の器^{ノギ}は削り先^{ノギ}の器^{ノギ}をもちけし蓋さくねを

と云也二條亞相記は或人の云膳を訓とく加之波手といふ也
古ハ柏葉を用て飲食を盛る故に加之波手と名づく云々

又伊勢の神事此時は三川の司これをつぎのむるありける

神酒をそぎてるるの司これをいづまきのむるありける

夫木抄は鴨長明が伊勢記を引てあるせる異國にも日本

までかゝるものある飲食をあるるを同傳して北史といふ書矣

九十四日本風の風俗を記しるもの俗無盤俎藉以柵葉と

見えあり盤俎ハ食物を載る臺の事柵ハハハハハハの木也

一土器の代り磁器を用ること三光院内府記云木具土器面
向之泰會會席祝儀ハ必用之疾塗物ノ器
平生受用之器勿論
美皆朱之上式有盤

又リ孟モ後世ノ
物ニ非ス大才天
文ノ比記モシ貞
頑色ノ記ニ見
ニク

清少納言枕草子
二云けけんと
ゆくと何とあ
らんまのべ

無故漆箔等随所各用 青菟 或白 大臣朝夕之器也 一切塗物
之疾堅固内之儀ニ疾 茶碗 不用之

道遙院称名院禁中御會泰内之時ハ自長橋局朝夕所用之
茶碗密々被召寄令受用疾キ大臣ノ規模此分ニ疾

續古事談表圓齋院大井河ハ後行ありる小先少井寺
乃前ハ絹屋 貞丈云絹をトハ絹ノ幕ヲ張り四方ニシテ

おもしろす大入道殿攝政の時ハ膳設られり茶碗をとりける

懸盤の事三光院内府記云平生朝夕諸家可用此盤事ハハ

雖然各依無沙汰不用い當所受用物者一日晴テ号檜懸盤
後打捨云々不可用之器ハ 貞丈云一日晴ト云ハ 〇貞陸自筆記

云常ハハ懸盤より糸ハ御基縁も同前仕ハハ精進の時ハ

足の舟も折巻りてきとりのハハ懸盤ハハ何ハ外を漆

今ハ切足ト云 雜記七

日ぬり内とバ光の朱はぬられぬと云ふ

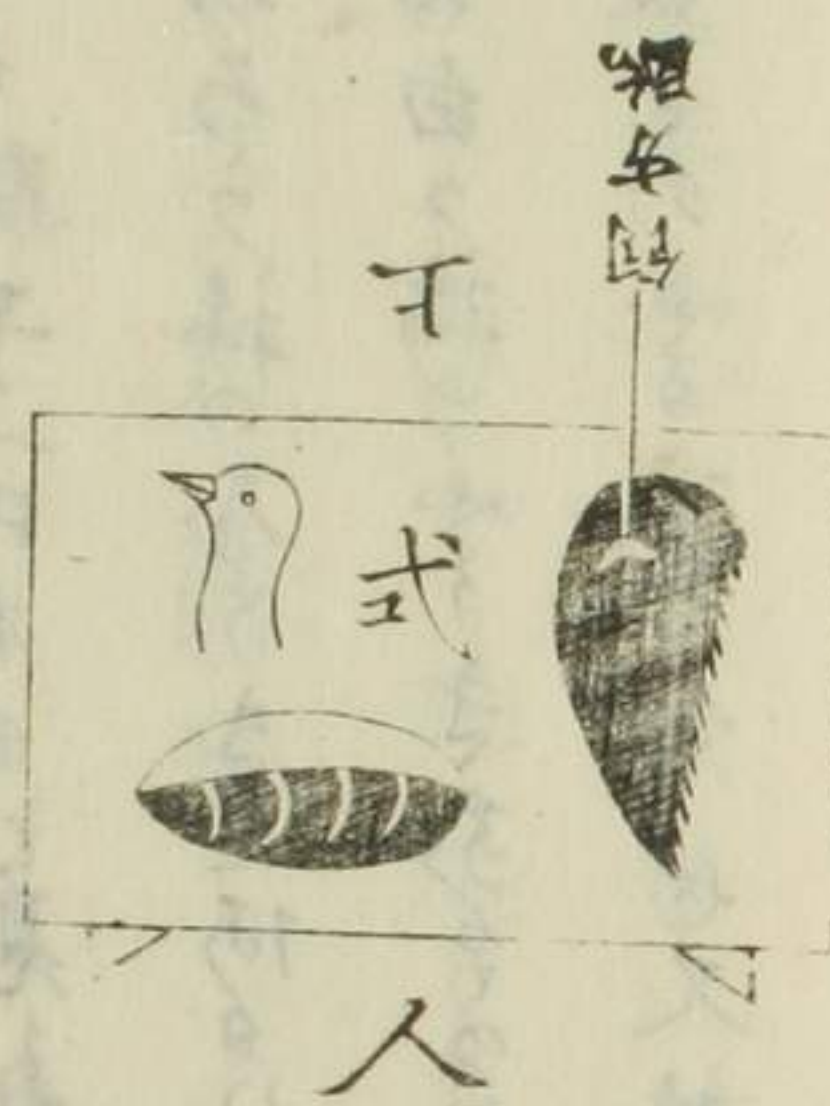
一活イキる鯉イナのち移る時ハ目を紙シで張り尾を包也板イタの上ウへて
る時ハ心ココロを切キるがよヨく危ヤブくのみを切キるを庖丁ホウテイ入イの秘ヒる古実コノミ

と云ふこと四糸流献方口傳書に見ミる

一藻モ分ワキ塩シホ分ワキと云板イタの上ウへてあるアル不フ作サあり先サキ藻モ分ワキと云ハ庖丁ホウテイ
見ミる魚イサをアてルる也塩シホ分ワキと云庖丁ホウテイ見ミるをアてルる也イハカトリ

二飼方カヒカタをおろし飼方カヒカタを上ウ下シとして式シキより上ウの方カタへアし右ミドリの方カタは
並ナく首カビハ危ヤブく余ヨの羽ハハ下シの方カタへ並ナく射イトリ矢目ヤメをアてルる
して意イの鳥トリの飼方カヒカタのホへアす

四糸流献方口傳書之圖



一心葉ロハの草クサ右同書ミダリ云ク食膳シヤウゼンの四方シヨウホウは糸イトをアてルる梅ウメをアてルる
と云るる見ミる心葉ココロハといふこと中院大納言通ナカノインダイナクノトウゴン云ク七十シチジュウ加カ其キ記キ

二主人シユジン饗ウケ赤木アカキ机ツクリ中畧ナカリョウ心葉ココロハ松マツといふあり
机ツクリハ食盤シヤクバンノ縁ノヘノ其キ四方シヨウホウ松マツノ作サシ也ナリ

一椽器ササキのル原氏物語ハラノミヤゴト云クあつねのやうヤウまはマはハのル所トコロさシつツきキ云ク
細流抄ホソナガサシ云クあつねハ盤バンの事コトまマハ相アヒく孟津抄モウジンサシ云ク銀ギンの楊ヤウ器キ也ナリ或アル云ク

薬器ヤクキの盤バン也ナリ四方シヨウホウの膳ゼン也ナリの事コト一説イツセツぬりヌリと云ク朱シユ器キ

いふ白木を楊ヤウキ器と云引入あり至徳記にあり以上北村季吟が
源氏物語抄に

見あり非説の箕
故器種の説あり貞丈按盤の多くは一物也と云折敷の類と

すの葉器の盤と云葉をうけあるやき物の折敷類の物也

関中又白木を楊器と云引入也と云白木の折敷の類と云

いふも入るは組ある物とすの葉は法脱さうふ手又中

院通茂卿七十賀元禄十
三年記に折敷三枚楊器五
蝶鳥又折敷一

枚楊器瓶子一口楊器と見あり楊器とも楊器とも書也源

氏よりろの杯の造りきと何のハ銀を楊器の形を作ると云

とすの白く楊のやうき器のハさうつとあるをいふやう

きハ蓋をのまる蓋とす也又按楊も楊も此の字を用也と

楊の字本ンあるは折敷類ハ檜ヒノキと作るを云楊

の木とて作ると楊器と名付るハ檜とて作家類を檜也

と云類の名ハ薬器ヤクキといふ説ハ誤アヤマリありと云

酒盃之部

一 一盃二盃と云を一盃二盃の事と心得あり。人何のあやまり
也何れも吸物有るを以て盃を出すハ一盃也次ハ
又吸物も肴も有るも亦一盃を出す是二盃也何れ
んも此也一盃終れハ其度と云ハ 銚子チウシを入れて一献毎ハ
銚子チウシありあめ之出す何れんもけ通也

一 酒を一盃二盃と云ハ今時乃人の詞也古ハ一度二度とのひ
くへうけハ二交入五度入と云ハ三盃入五杯と云ハ
一 古ハ祝儀も乃ハ盃と云ハ皆 けりけりけりけりけりけりけり

いふ事ハ近代の事也今も盃を朱ぬりありてうすく砂多
くするハ^{カシラ}けをすむびる物之京の^{ギンカノジ}根閣寺ハ七賢乃
盃とて七^{イレコ}入子の盃ハ晋の七賢の名を^{フキエ}爵繪ハ志^{シトシ}乃
盃阿^アハ東山殿の比盃と^イハ信也いづの^イき^イ物^イなり
東山殿時代ぬり盃ハ^イ後ハ作^イる^イ多^イ也

一盃ハ^{オシキ}ツ折^イぬ^イる^イて出す物^イハ二ツ重^イて出す^イハ甚^イ也
る^イ之^イ故^イハ軍陣の時^イ敵^イハ大将の首^イ取る^イ時^イハ有^イり
酒の^イま^イる^イ時^イハ又切腹^イする^イ人^イハ酒の^イま^イる^イ時^イハ盃^イ二ツ重
て出^イして二献^イ吞^イむ^イる^イ者^イハ二献^イを^イ忌^イむ^イ之^イ能^イむ^イ今
世^イより^イ年^イ終^イる^イ盃^イ二ツ重^イて出^イす^イ者^イハ^イ多^イく^イある^イ也

一婚禮の時夫婦盃をとり^イて^イす^イハ男先^イ吞^イて女^イは^イす^イす^イ古
法也男ハ陽女ハ陰也陽ハ貴^イく陰ハ賤^イハ陽ハ陰ハ^イさ^イき^イを^イ
幸天地の道理也^イ然^イる^イ者^イハ或^イ説^イハ昔^イハ男^イ女^イの家^イハ^イ終^イて^イ純
夜^イハと^イまり^イて^イ後^イハ我家^イ一^イ迎^イハ^イ來^イる^イ者^イハ^イ女^イハ^イその^イ家
の亭^イ主^イ男^イハ^イ其^イ家^イの^イ客^イ人^イある^イ者^イハ女^イ先^イ吞^イて男^イは^イす^イす^イ者^イハ
婚禮の盃^イハ女^イより^イ吞^イて男^イは^イす^イす^イ物^イハ女^イ先^イ吞^イむ^イ酒^イの^イ心^イ見
る^イ心^イ也^イと^イ云^イは^イ説^イ也^イす^イり^イ也^イ用^イづ^イる^イハ^イ女^イハ^イさ^イき^イく^イ陽^イハ^イ陰^イハ
先^イハ^イ幸^イ順^イ也^イ陰^イの^イ陽^イハ^イ先^イあり^イハ^イ逆^イ之^イ神^イ代^イハ^イ伊^イ井^イ諾^イ尊^イ
伊^イ井^イ冊^イ尊^イ天^イの^イ浮^イ檝^イの上^イハ^イて^イ夫^イ婦^イの^イ交^イを^イ始^イめ^イハ^イ村
女神^イ伊^イ井^イ冊^イ尊^イ先^イ祠^イを^イか^イけ^イめ^イハ^イ女^イの^イ先^イより^イ宜^イし

雜記七

十七

中をのむ人の盃を別人とて又中をのむ事ある

一 今徳利と云物を古湯スバといひ多くむらゝやまの徳利は
皆湯を作りたる故と云々

珠那代醉巻八云
柳蔭樽也曹植

柳蔭ヤナギと云柳の本を作りある手樽の事と云ハ別の木ささる
の木をとり平くたすひの如く作りたるを柳蔭と云古の柳蔭
とハ大不遠あり古柳を用ひるハ柳木ハ堅くある本と水
氣あハ木がけは樽の酒をぬるぬる柳をま用ひる

一 又云柳一荷を云ハ柳を見作りし樽一酒を合ある柳蔭荷

と云とヤ説宜しハ以文昭日記云二月廿七日此方所
能有出楳五荷ニ荷あり時云
三荷百治古 清湯殿上の日記ニイナカ哉荷

と云る所を近年諸藝才賣買代物は云屋をぎの代古酒百文別

三枚新酒百文別四枚ト云くこれらの文を以て是れハ「阿多野」
百濟寺クハタラテライナカ柳を造り酒を造り出た不の地名ある

雪玉集道遥院實隆公家集也寄酒述懐と云題をよめる 此むるハ交野カタノあり
うき天時酒川と云く一て人のを毎の云く正月此年終

記云天野酒河内國ミナト乱事ある村ハ京都見物橋を進上
毎年二月七月十月朝日富士殿ヨリ鬘蛇千本白鳥一天野酒百荷
將軍家工進上アリシ度東山殿年中行車年中恒例記等ニ

一 鉾子提子テウシヒサゲは蝶形を付る事ハ蝶ハのと云ある日ハ少く草木
の花の毛を吸ておのの友とおはせあると云ふもさう

一洗は佛をつる
 蚕の蝶よりある
 う子を多くうむ
 物ゆへそのころを
 以て子孫繁昌を
 祈ひて蚕の蝶の
 形を桃子に包む
 と云はば後ハ婚
 礼にまてハより
 産むのころハい
 めい也

人もそのごとく酒をのこして人と申すもさびしき
 腹もさびしきひあどすもいよのぬる也さぬ酒のむ人蝶の花
 の意を吸てあまびさのむむせといふ教のなる蝶の形
 形を付あり瓶子は蝶花形付も同し心也
 一瓶子一對口を蝶を形に包む時吐花の花の方より男蝶
 右の方より女蝶と
 一糸く圖書は祝言の時、瓶子の口を蝶花に包まず印
 は包むと云はるぬべし何れは、テウシヒサケ瓶子授子と瓶子一對と
 蝶形はほめ、蝶の教甲よりある、四の字をこむむ也
 一瓶子の口外は包むもさびしき印、瓶を包むはさるるはこれと

といふ菱ハ水草を水底よりびり志ぐり印のこも也さ
 つよき物にちびり志ぐり印つよきを祝は用る酒も
 水取の物ある、ヒシ菱の花形を口を包む也
 一瓶子授子は祝の時松山たち花山たちをさ、を蝶花形より
 て付る印、松はゆも色もさるる、子年を、種々物、山たちを
 ハ冬よりさるる雪霜といふ、さるる、実も赤く、シメテ熟さる物、
 二品ともよめ、さるる物ある故、祝は用る也
 一瓶子の柄を包むる、あき事、京都將軍殿中より用
 何れ、ハ瓶子、柄を包むる、大草流式之膳部記、京都將
 庵丁人大草三郎、軍家の瓶子の柄をつまはる、大草流ハあくはとあり
 左エ門尉云ノ記

東鑑卷世酒杯合
片口銚子置折敷
上銚子覆^{カサ}

古今著聞集卷十四
云白河院深雪ノ朝
雪見ニ御幸アムト
テ中畧朽葉ノカサニ
著名童二人ヒトリハ
沉ノ折敷ニ玉ノ盃銀
血ニ金ノ橋ニフサヲ
モラレタルヲ持タリケリ
一人ハ片口ノテウニサ
トテ金持タリ去リ存

ロノマウシト云ニ代テ
モロク十ノテウシモ古
ヨリ有シヲ考ヘシ
海人藻芥云山名修
理大夫入道 紀州佐別
西園寺護
一比仁和寺ニ居住之
間年始ニ器向彼宿
所之處三献ノ義アリ
毎度各鍾也銚子片
口ヲ畏タリ 此事高
尾張八道以正難之
云銚子ノ最事全
中ニ不足ナリ云ニ以
テ難不肖身片口銚
子以下祝儀式ノ具
足ハ武州師直ガ代ヨリ
京中ノ職人給之間切
形不足ナシト云

魚板持系記云所銚子の柄包ハ中殿中ハ世ノ世あり云
されハ柄を包む法式ハあきまる也又銚子をバ一^{ツタ}二枝と
云也旧記見スあり

一 両口の銚子ハ畧儀古殿中見ハ片口を用ケル一魚板持
系記云此祝の時ハ片口より一式膳形記云公方極成を
其外きるといふ時ハ片口より糸ハ口をも包むるをい
自然ク口あき時、もろ口よりハ口の包括^{カサ}他流ハ木
の葉をのひ^{カサ}多^{カサ}多^{カサ}の事ハ一向あきまるい云一糸ハ少書
ハ云式三献為のハ盃の時ハ銚子ハ口可成^{カサ}公方極^{カサ}
正月五月^{カサ}外^{カサ}常^{カサ}朝^{カサ}ハ^{カサ}口^{カサ}のハ銚子白^{カサ}シ^{カサ}
白ハ白めりき宗
五一冊板書あり

酒も白酒也又私持^{カサ}て片口^{カサ}のてりし^{カサ}かけ^{カサ}の口を包む
也出陣の時も其外祝言も^{カサ}口^{カサ}の銚子を可用云今世
片口の銚子絶て皆もろ口斗あり一説^{カサ}て^{カサ}の右口ハ切腹
の人ハ酒の^{カサ}時^{カサ}口^{カサ}より酒を出さ^{カサ}常^{カサ}ハ包^{カサ}くと云
ハ何^{カサ}まり^{カサ}之^{カサ}切腹人の用^{カサ}表^{カサ}口^{カサ}を^{カサ}付^{カサ}て^{カサ}お^{カサ}く^{カサ}ハ
あ^{カサ}す^{カサ}も^{カサ}ろ^{カサ}口^{カサ}の^{カサ}て^{カサ}り^{カサ}ハ大酒^{カサ}より^{カサ}客^{カサ}人^{カサ}入^{カサ}て^{カサ}れ^{カサ}て^{カサ}吞
耐^{カサ}右^{カサ}の人^{カサ}ハ^{カサ}右^{カサ}の^{カサ}酒^{カサ}を^{カサ}盃^{カサ}ハ^{カサ}入^{カサ}蓋^{カサ}き^{カサ}る^{カサ}ハ^{カサ}両^{カサ}方^{カサ}ハ^{カサ}口^{カサ}を^{カサ}付
多^{カサ}ハ^{カサ}切^{カサ}腹^{カサ}の^{カサ}用^{カサ}表^{カサ}ハ^{カサ}あ^{カサ}す^{カサ}切^{カサ}腹^{カサ}人^{カサ}ハ^{カサ}酒^{カサ}の^{カサ}時^{カサ}也^{カサ}耐^{カサ}毛
右^{カサ}の^{カサ}こ^{カサ}と^{カサ}丸^{カサ}口^{カサ}より^{カサ}酒^{カサ}を^{カサ}出^{カサ}す^{カサ}ハ^{カサ}銚^{カサ}子^{カサ}の^{カサ}持^{カサ}持^{カサ}ハ^{カサ}丸^{カサ}と^{カサ}丸^{カサ}と^{カサ}丸^{カサ}
右^{カサ}の^{カサ}手^{カサ}を取^{カサ}り^{カサ}て^{カサ}持^{カサ}て^{カサ}送^{カサ}す^{カサ}也^{カサ}右^{カサ}より^{カサ}酒^{カサ}出^{カサ}る^{カサ}事^{カサ}ハ^{カサ}右^{カサ}口^{カサ}を

用ゑハ乱酒の時斗あり

一 注の酒と云ハ今世ハ筒ツツの酒と云ハ用一又さく元と云ハ
の葉をさくとも云よりて升筒ハ酒を入故さく元と云あり

一 今時蓬萊ホウライの酒スハマ基スハマと云 洲スハマ溪スハマの基スハマ 三の山を作り松竹霍鳥
あざを作り 五下ノ肴ををを器多の昔より制するこれち
風流のるを親式のるよりあさすき酒島の興出まへ

又花ををど作り物して盃をおく盃基も有今乃世のごとく
祝儀ハ必蓬萊ホウライを用を云はハ部 東鑑卷四十九正元二年 四月三日

庚子晴入御于入道陸奥守亭シヤスレコロ 御息所中畧 御息所後

方ス進風流ス 造蓬造蓬 又鎌田草子云君の是追の山下向を翻

乃老んがうんげとどん 萬世を會わうらひを蓮兼 柳柳 君をいふ

ヤせんさあわうらひの志下組 魚魚 志鹿 のとり入事鹿符 まんじハ

五人の子どもをバミ三河 の己の國あまけの山鹿符 志鹿符 のりまごういぬ

又内海 うら沖 のおきよお不あををわう一てい

一 今世為基と云物昔も有之古ハ嶋歌と云蓬萊も詩歌の因之

洲溪歌洲溪歌 ぬ此の基の板を作り海中の橋のまを海へさし出さる
飛古の園のみくあるを洲溪と云されを詩歌も洲溪うとも云
五上ノ肴を盛るく ちざうハ岩木花ををを置く太平記卷廿
四天龍寺供養ノ条 云御前ハ風流の詩形を居されより大井川の景題
を表して水紅錦を洗ひて感興の心を添さうけ日貞丈按 洲溪ス

永事堂町殿行幸
記云志由所蓋
とあり則嶋世蓋フ也

蓋ハ青を盛のりよある古禁中より草合花合根合と云て色くのお
を合せ款をよみて真せりれり多し其合せ相を多くハ洲溪の巻を
依りてそれのせて出されり多し榮花相語古今著聞集
其外古き相語は是より一長き有る也

又選注云竹葉酒也
云々

本草綱目竹葉酒は
諸風熱病清陽也
淡竹葉煎汁如常
藥酒飲之

酒をさくともくるとも云ハさくハ三く也くるとハ九献之酒ハ

三三九度呑むを祝ひとする故に九ハ陽數とてめでさき数なり

唐土にも九献と云ふあり左傳僖公十二年の季云楚子入享于鄭
九献と有りその註云用上公之禮九献酒禮畢云々

一 正通と云ふもの出るともいふあるは貴人の以前各めい出され

は酒終るまで一腔の美人の口前めい出さく時ハ通ると云常

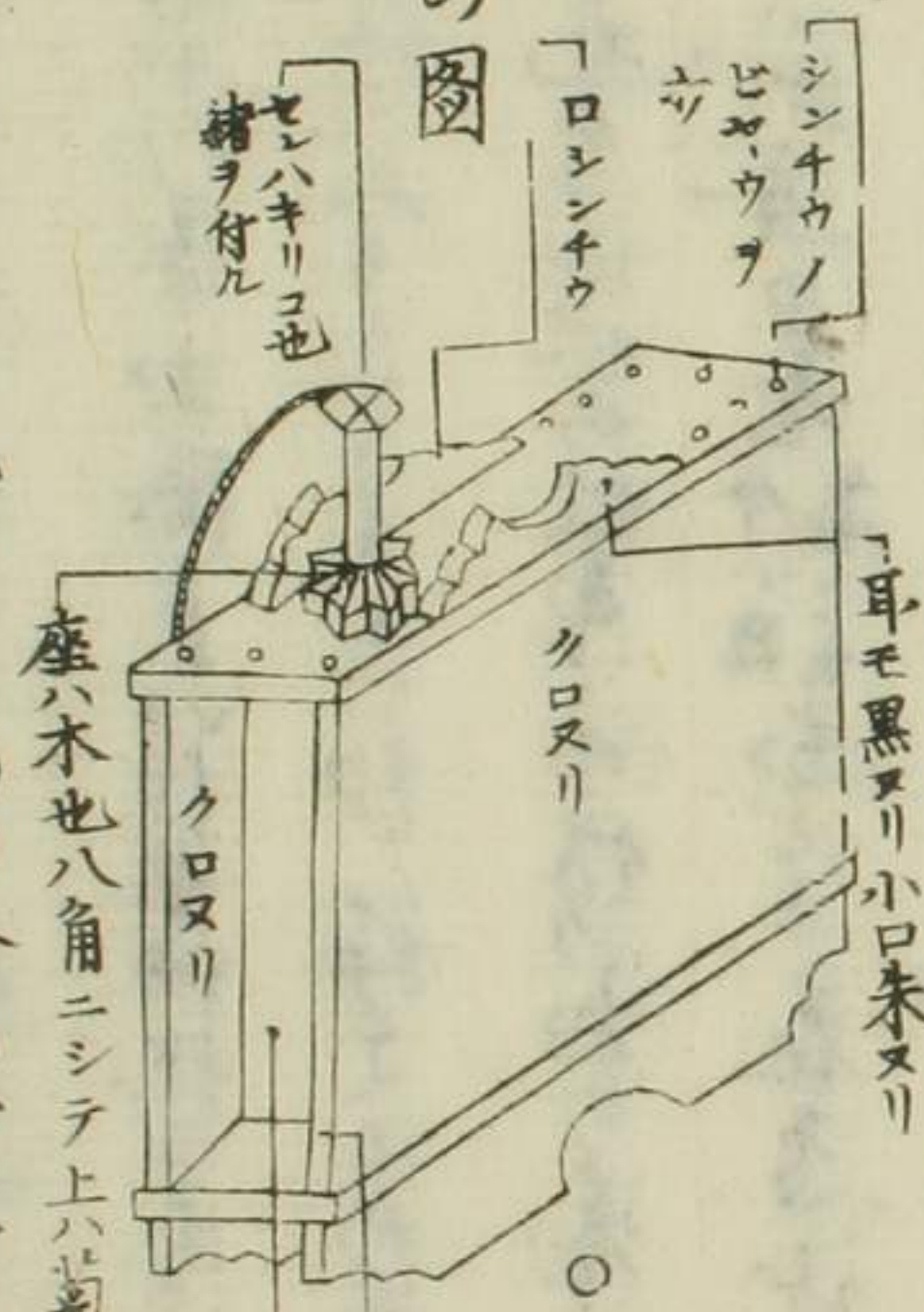
よめい出ると云常公免悟記に元より酌仕振吞指箸云々

一 さく指のり尺素往來也 系於相軍 例式指楯一個傳桿兩三

とありさく指ハ箱をさく指はさくさくゆひるとハ常の指
を今 かくを入るとハ ぬひるを云くさく指ハゆひるや南世をさく

ぬおるぬは後ハ何とぬともありぬり後ハ後ハ繪圖を記也

指楯の圖



○ 惣幹黒スリ耳ハ朱スリ也

板ノ小口也朱スリ也

両方ノ小口如此引コニテ有

座ハ木也八角ニシテ上ハ六葉座也

右のさく指大なるも小きもあり今ハ世上は沢山ハあり
一 今時蓋は用ゐるゆへに内ぶかりとて土器の内を多く二あり

蓋の楯はやくさくさく土器あり内ぶかりとて名ハ旧記に見及ぶ

古のまき物あづ〜ももといふは、祝儀あづま、いむ登き名也又
 内々ありといふく〜ををみよきあづ物〜これをも〜と
 古のけを〜す〜されば〜のひわく〜を〜
 ちけて酒のむす出陣ふいむ中同記あり是みかぬ土施を用
 といひ能授〜みかき〜まむ祝とあり〜

一 押物ヲサモノといふ花鳥山水の形あどの作り物の基は酒の肴ありて出せを云
 一 盃の基といふ洲濱スハマの基今ハ指あづま花鳥山水人形あどの作り物五
 してそれハ盃をまて出せを云也

一 三星ホシ五ツ星の盃と云ハ河濱スハマの基ハ花鳥ホの作り物あ〜
 盃ぞり ○○○ ぬは大小を並〜墨くを三星と云 ○○○ ぬは

あるを存り星と云ハ存りも随くハ大あを置也 三星五星本とありて
 三星は物とあり

一 ぬはけ物と云ハ大あのみ〜けハ酒の肴をありて出せを云ハ折
 津ハチハ肴をありて出せ小同〜心也 土器はあり〜肴を〜三星も
 基ハ居て出せ〜陪膳記ハをあり

一 折の物と云ハ折ハ酒の肴をありて出せ〜 折の事ハ
 あま記す

一 食籠シヤウカウの物と云ハ食籠ハ酒の肴をありて出せを云
 一 施子の柄ホシ何の星をばき〜と云ハ星の上ハ菊乃花の紋あ
 多あり又ハ施子の星と云也ゆ〜とハ星の前後ハゆ〜
 輪ワを合〜と輪を〜と云 輪の輪をゆ〜
 と云ハ同〜也 一 ちゆ〜のきを

何れ星あり故う〜の星と云ハ又〜の星と云ハ是
 施子をとり討子の大ぬびの尻シツさ〜その星のうげハカウ信る〜の

名也つすくく〜と云詞、素をわくまをさる似ありや、婿礼を
の対、さむむ詞也

一 舊記に殿中此一献又一献の時をくはる、酒宴の対と云るん
そく一度酒をまむむ、飯の何れ一献二献と云
とハ別あり

一 勸盃と云、入酒をのまをる事也、勸盃と云くさくさくまをき
むとよむ也、勸の字ハクハシと云ケシとよむ、古よりクハシニ云
あ〜、ハ〜、クハシハシと云ハシぬ

一 白酒と云事、奈く関書よ公方様と云ハ正月五日以外、節朔
ハ、片口の由、純子白ハ酒も白酒也、あり白酒とハ今も有白酒之
濃ハ者ベシ、梅米ハ酒の素を
や〜、よす〜 飯米と作是、禁裏と云、御代

警りの初、大嘗會と云、此非事、有は、神ハ白酒
黒酒と云二品の非酒を奉、シロキ 白、常のす〜酒之
右白酒ハ是の事と云、遠也、名キ 黒酒ハ常山クサキの根を煮、シロキ 燒
して酒ハ、サカキ ざる物、中古黒胡麻の粉を用、シロキ ぬ
るも、何〜と云、是ハ非也と云

一 盃をうけ、サカキ ぐせと云、シロキ 罷くる、サカキ さい、シロキ あり、シロキ 軍陳の対、敵の大
將侍大物、シロキ あり、首をさる、シロキ 耐、シロキ 実、シロキ 検、シロキ 終、シロキ 其の首、シロキ 酒を飲、
る、シロキ 土器ニツ出、サカキ して、サカキ 逆手、サカキ 砂、サカキ 其酒を、サカキ 飲、サカキ け、サカキ 入て、サカキ の、サカキ 事、サカキ 飲、
新、サカキ して、サカキ 首の、サカキ 糸、サカキ 酒を、サカキ ころ、サカキ して、サカキ 二、サカキ 首、サカキ け、サカキ せ、サカキ ぬ、サカキ 二、サカキ 盃、サカキ 是
飲、サカキ け、サカキ を、サカキ 手、サカキ して、サカキ う、サカキ け、サカキ けて、サカキ 置、サカキ 入、サカキ 依、サカキ 之、サカキ 為、サカキ る、サカキ 二、サカキ 盃、サカキ を、サカキ け、サカキ け、サカキ

貞順色記三書
 五ノ露を抄三方
 又何をも盃をもち
 かけてうりひきまて
 も茶湯をのりある
 の時に出せやあ
 けぬして不苦
 但是ハ略儀也云
 むろも畧儀の
 時ハ盃を膳のち
 こそ出する人あ
 り

削花を本とまふ
 下ハ紙花を本
 とす

ておくるをいむにゆるよ今時吸物膳のうらよ盃をうりぬせ
 ちそ人よまあるりいよくお役也

一 さい越しの酌をききふ事さいお居也お居ハ屋敷の隅へ
 物のあてなる所を越して食物呑物の飲をくまをたを食
 むるに生手細囚人を捕へて牽はかこある時牽の
 格子をぬぐく外も食物湯水を入れある格常は
 も物をぬぐく食呑物を入るをぬぐくをいむにさいごの
 酌きこふる系々少書酌系記おまふり

一 盃の基を草木の花草をを作らすするありけつる花
 を本とすけつる花ハ本をぬぐくす削花を夫とす

修の故けつる花とま之新續古今集新詩多云ひえの山左

右方トカレ相手己けてけつる花ハける侍女郎花まきの方女郎花ををこお

ありけるをくもそ何とびけハお祈りくもそハにまき

僧都観教「草も木を佛よあるをいふなれとをこお」

かひきけれ 右の洞虫よけつる花ハける侍女郎花まきの方女郎花ををこお

削花ハ昔よりあるる泡接は記女郎花又古今集削花の名云二条の

后春宮のみやすおとけつる花とま之けつる花とせりなる

をよもせぬひなる文屋康秀花の本ハ何とま之けつる花とせりなる

咲ふたりりりこのこおをまきまき

何とま之けつる花ハける侍女郎花まきの方女郎花ををこお

さうぬ本あるれいふは花の本は何ういふとあるれ又上古より削り

花何の池梅は記あり

一東鑑卷三十は靴子覆蓋とあり足へあり蓋を覆ふ云ハ

靴子はいぬと云ふは物に似たり折るなどの類を云ふとて

覆ひおきたるを云ふべし

一この物一はと云ふは犬追物の時酒のむろを云ふ蜻川

彩衣の耐親元日と記は文明十三年七月二日貴殿浦

上へ出胡犬何り中畧畫以後こがしつこのは酒を云ふ

とあり犬追物あるげは馬場一盃靴子有持出りて耐子馬

上より酒のむろ犬追物の書るあり酒を云ふ力を潤いこがし

をのむむむむあり

一三間の御所ウツの糸乃池一献と云ふ旧記もいふ主殿の糸乃

池既三宿有りしと聞ぬ則主殿もその池一献あり庭上へ居

給タマヒ既の前はその事ハあり

一大鼓樽タイコと云物むろしとありし物と急キなしと云物とて

ハあり進物も昔も之を常用集永正天文の記に云大鼓樽タイコあり

一唐靴子之事カラハジ鎌倉年中行事云正月朔日何座に二重は

唐靴子ウチノハジ同靴子ウチノハジ扱有と云唐靴子とハねまてこしと云

靴子なり又ハ木をて作る云ぬりしと云も何りハ扱と云

ら唐めきたるハ唐靴子と云あり一外子細あり

大鼓樽の形ハ舞床
の大鼓乃取て上乃
書付ハを口ナレ
るハ口字の如し此
圖柄ハ長考と云
繪本におよぶ

太平記三云主上
笠置市没落の
条二俄のるま
あぐりのあぐ
はあぐりりれ
てうごのあぐ
しげあるまた
げのせまひう
てま

輿類之部

一輿コシは四品有り一は板イタ二は網代アミロ三はアミろぬり
 ぐ一是之板イタ一は一段親式を以て時用之に次ぐれり時を
 網代アミ二は是は張ハリ二はぬりぐ一は畧儀也是は用アミ也
 板イタ二は此時ハ供白シロヒタ垂レ淨衣シヨウイの又ハ單ヒト垂レ大帷オホカドビシを垂レ
 著アミ也網代アミ二は是はぬりぐ一は此供アミ二は打アミを著アミぬりぐ一
 の時ハ此供アミの著アミぬりぐ一は貞衡シヨウケウ説
 一板イタ二は一名ハ木キ二は又棟ムネ立タテ又棟ムネ上ウエ又四方シヨウホウ二は又
 鎌倉年中行事云正月五日の夜ヨ五イチノ坊ボウ始ハジメ管領クワンリョウハ出デ恒コト

東山殿時代
三糸西実澄云
三光院内有祀云
金輿、四方輿之代り
也當代、車之代諸
家之輿有扇僧云
武士、無扇云

例也公方様ハ公方様ハ是利成氏の事を云 白直垂伊致桐涉輿 棟立ハヤシヤカキカ者昇カキ

一 網代アシロホハと云ハ素き竹を蔭カく細く削りあしカるを組カてこハ

二 張ハり付カて忍カぬカりのおハぢカちカをカおカるカ

一 ころ輿コシと云ハタビニタビニヲヒテの表カをカらカて包ツみカおカぢカちカをカおカるカあり

畧カ俊カあるカおカくカ但カぬカりカこハよりカ上カ云カ 貞衡カ

一 ぬカるカこハと云ハ漆カぬカりのカおハくカをカうカるカもカぬカるカもカあカくカも

黒カくカもカをカつカけカぬカりカ斗カもカぬカるカ 古カをカをカおカるカこハと云カ今カのカ世カのカタカノカリカトカ云カおカ

殿中日カ記カ云カ小串次郎カ在カ東カ門カ尉カ 貞産カ不カ 方カよりカ被カ尋カヤカ等カ

明日涉成カの幸カ之カ亭カ主カ白直垂カなるカべきカれカぬカ 東山殿ハ妾懐カ 姓カ小串氏カ正カ社

預置若君カ山カ延カ生カ之カ小串方カ正カ所カ工カ 涉成カ身カ依カ伊勢守カ貞親カハカ尋カ起カ也 涉成カ派カ式カ日カ之カ書カ不カ可カ寫カ

白直垂裁次カ法カよりカ輿カの時カハ裏カ方カ差カ入カ常カのカ比カぬカりカこハの

肘カハ只カ上下カ着カ也カはカ段カ法カ輿カのカりカてカはカ閑カ僕カ云カ 貞親カノ 答カナリ

一 棟立カの事カもカ是カ 簾中旧記カ云カ正月二日カ八肘カのカくカんカさカいカるカ

ハカ成カ 涉カ和カさカ備カはカ志カぬカりカどカめカいカてカ車カハ先カハ上カさカるカ身カ

はむカ手カあげカめカハカ法カ有カきカちカやカのカきカきカきカせカいカとカ 貞衡カ云カ常カの

こハハカ履カ祿カのカむカ手カをカひカきカくカきカるカ也カむカ手カ阿カげカハカ履カ祿カをカとカて

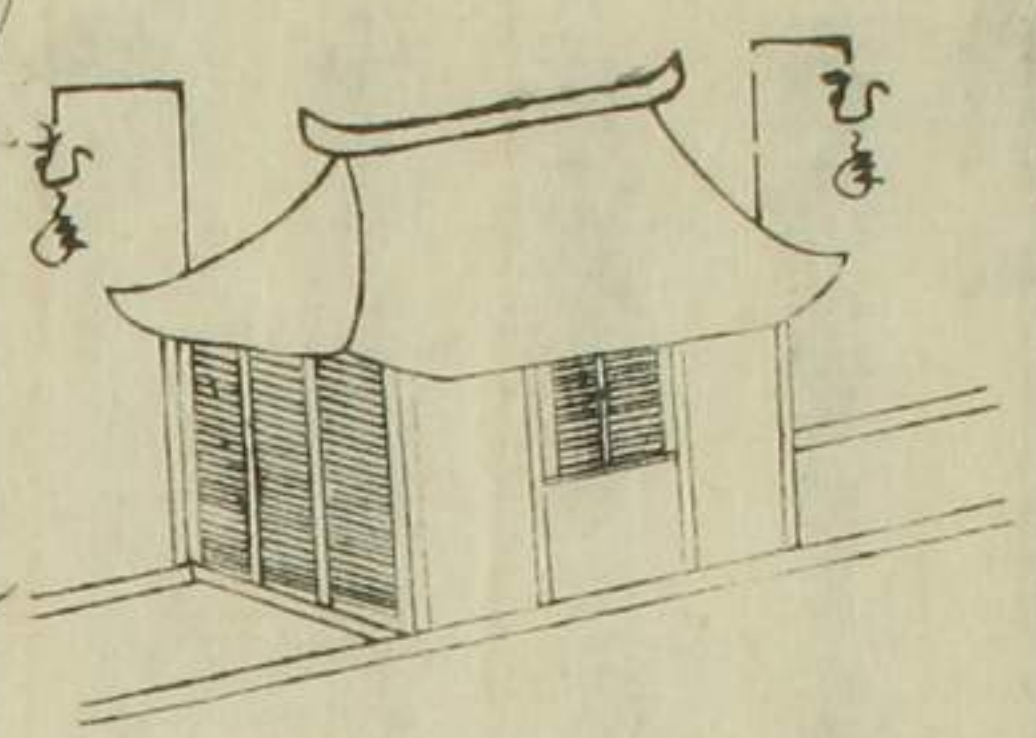
むカ祿カをカ高カくカきカるカ也カこれカハカ白カ木カのカこハとカ式カ正カの時カハカ男カ女カともカハ

むカ手カまカめカハカ婚カ礼カもカむカ手カ阿カげカをカ用カ也カ 貞衡カ云カ常カの

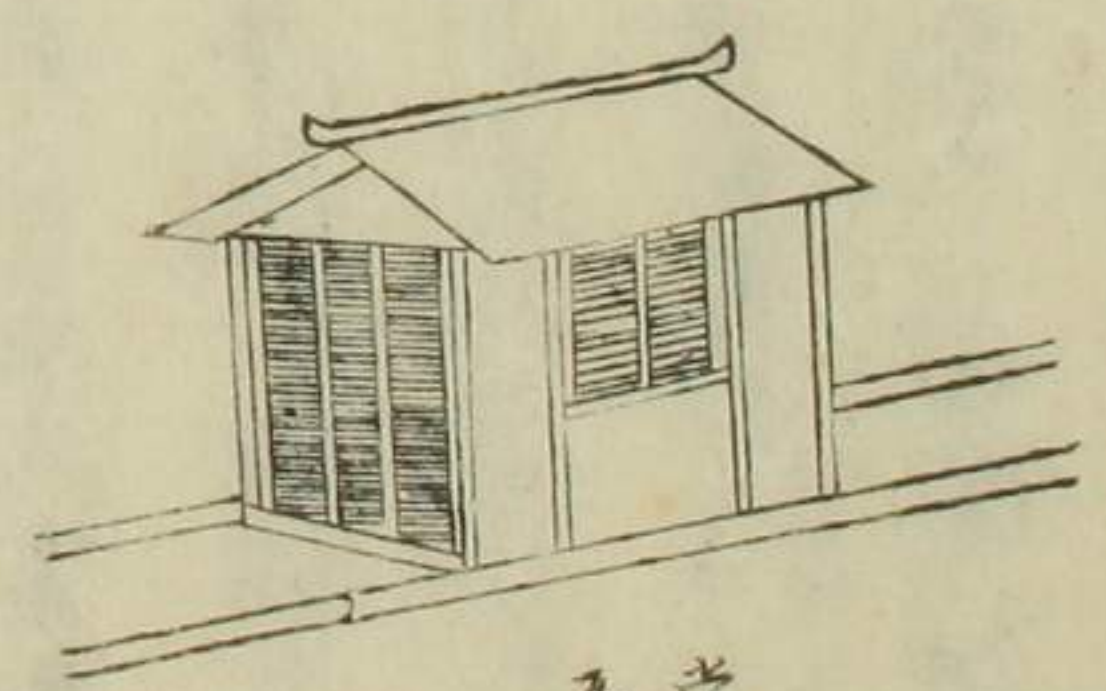
一 四方輿カと云ハカ初カ書カ書カるカむカ手カ阿カげカそのカこハのカりカとカ室カ町カ記

應永三十年十一月二日の記文ハ自善法寺涉社系ハ淨

夜四方輿 カ者十
二人白 役人浄衣と何れ四方輿と名付の事、この
 屋様の四方はむし標をまざる故也



四方の、此四方は
 むし標をまざる四方
 ともむし標をまざる
 むし標をまざる上
 のむし標をまざるの
 ことなり

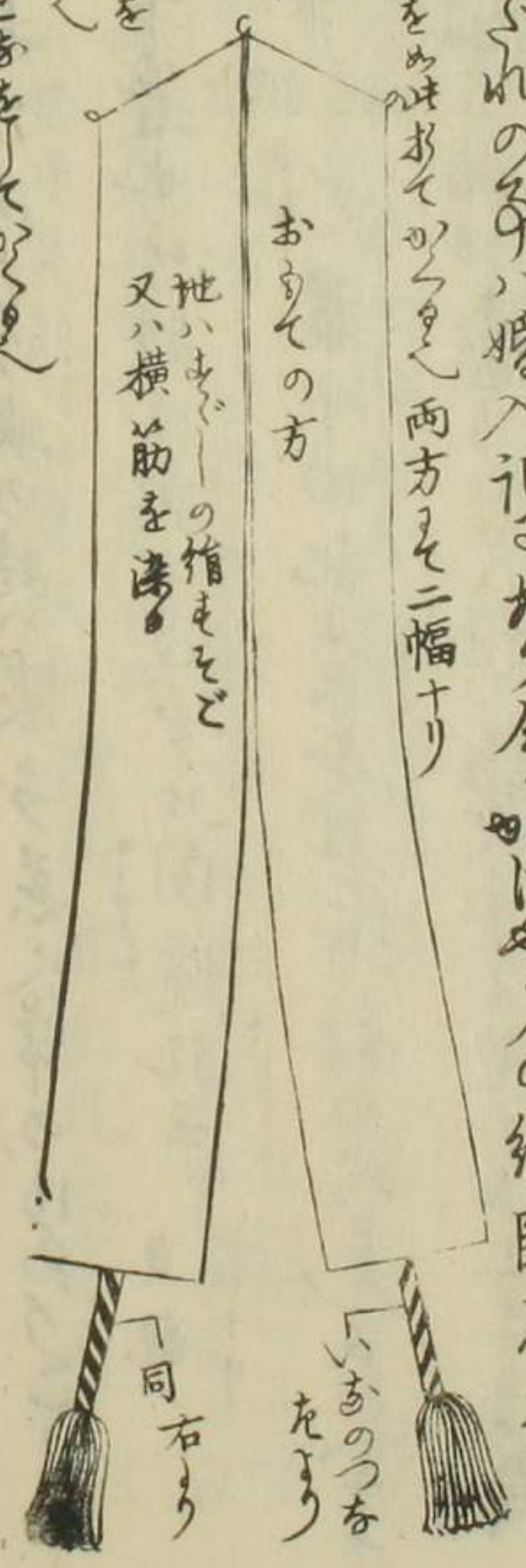


常のこの
 屋様の事

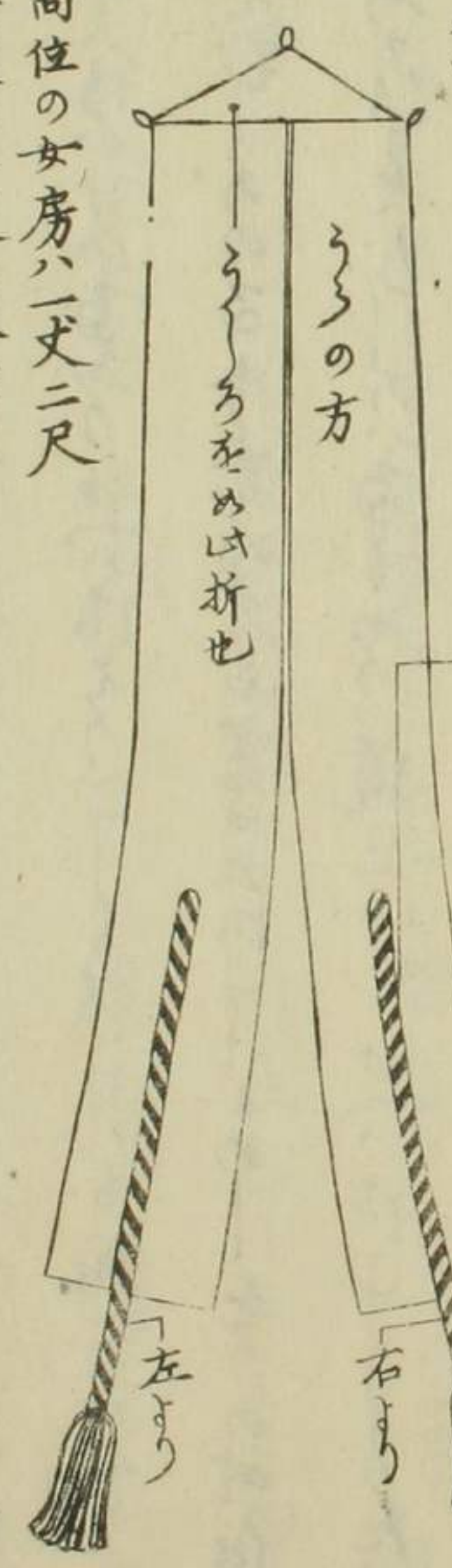
一この下まぐれのものハ婚入記はあり、今つけやうの繪圖に記せ
 一幅をぬはせてつらへ、両方を二幅ナリ

下簾の圖

三角のちとくを
 お打まゝに
 三折糸にて己おきてつらへ



簾の内はかゝる類とまゝに
 まぐれの外ハあり



惣長 高位の女房ハ一丈二尺
 其次ハ一丈一尺二寸

一みせきぬと云右の一丈一尺貳寸の下まぐれをまその内へ入てかけぬ
 さまの外よりかけざるを云五折の物、この、あつちハみせきぬも
 かけぬ也下まぐれハ高位の人々も、この外の人々もみせきぬも、
 九折と折らぬ物、下まぐれハ十二折の物、輿ハ、この也
 一女輿の物の次第十二折ハ九折、次ハ七折、次ハ五折、次ハ

一統云輿の
 網ハ八尺七寸也
 下まぐれ七尺九
 寸とあり、是ハ二
 折の尺あり、

増入記あり

一 此のえんの幸峯川記云ホ一の油單布ニ油引タル也のありぬきこつては、
 いずれ但旅の時、辛度の雨まほこつては、
 油單辛度かけぬる見及不辛度は、
 實云ほこつては、
 及は女中、
 一 輿のあてむ、
 供託ありひとむ、
 おちちを引出てあてむ

前ハのまゝこれおさされは、
 小での儀、
 よくい時、
 法思ハまゝ、
 輿ハ入ハる風、
 一 近來コシ婚レ礼イの行カ列レを見、
 一 京都將軍時代、
 一 古今の乗物カ駕籠カをも、

あんのりあを
と云太平記
卷十三云四郎入
道を備車せ
るに別覆を
惟

讀ん字々を
も也

活免を受くる人ハ輿ヲ乗取コトハ免をき人ハ騎馬あり
出家もも輿はけられぬ馬は乗る人ハ云今の駕
籠あは中古旅人ををのせ又合戦の時手負をのせるあ
作りゆゑ物と古老の物語又云今の駕籠乗物あは云
物ハあんと云物を後ハ結構作りあたる異本曾我
物語河津最後の条はそ有べきはあはれ俄ハ何んだ
云物ハむあき尻をかきのせて宿所ハをハゆりたれ云ハん
ふと云物ハ旅人を乗る駕籠也山駕籠と云物ハん
あつとも云ハ和名抄云復輿 和名 といり是ハんを乃
字あるべし
アミをアんとソハの字を略し

籠乃輿と云物何ハ太平記
才三ノ著 主上笠置
云日頃の
行幸ハ車ハりて風輦ハ天子のハ
天子のハ 数方の武士はあはれ
月卿雲客ハ何やげあ籠の輿侍馬はたまけのせられて七条
を車ハ河系をのりハ六波羅といはせ籠云ハ籠の輿と

云物ハ今の駕籠乗物の類あるべき也
乗物と云輿車の熱名也源平盛衰記世八の夫
友時赤重將
之許条云 中將
悦で友耐ハ乗物出でて内裏ハ甚ス女房母もはま
思百けきどもせめて志はゆるは車はめハ出給ハるそ是
車を乗物といひしや也

一車ハ後より乗りて前より
盛衰記世三本重
院系ノ条二見

源氏物語ハゆげ
ん不さちの乗物
とあり普賢菩薩
の乗物ハ白象あり
これらものゆげ
馬ものもああり

輿ハ新より古くをより下りあり

一 青いろぶし黄と輿也是も新云塗ありと黄まの漆

ぬりある婚入記云ありと云又よめむのひの

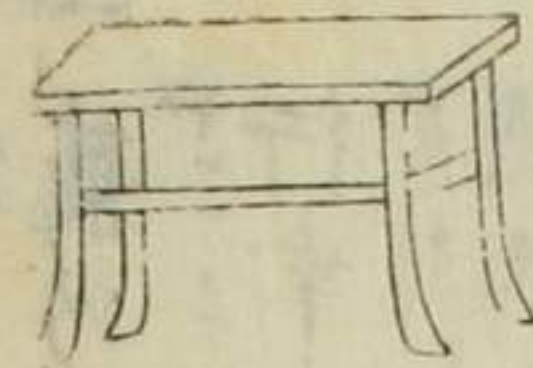
時をより半の町いすのあり云黄と輿も塗輿あり

一 漆とそと輿をのする基のあり婚近記は餘圖何

式部少輔亭御成記
又ありとそと何

一 木一基と木一の長柄をまわくおくま板の

四足あり本名をば志ぢと云也榻の字也車はるる



榻如此物也

車の志也、金物あり
あけまきをいふあり

一 ちよとくまんぬりごのあり年中徳大名は成記は

まんとして名のぬりご一見は系内もあき

ハ直輦と書ある一 走脱故実ハ直輦と

一 檳榔毛車とハ車の座ねの上を檳榔といふ木の葉を

飾るる車也檳榔の葉ハ大くして檳榔の葉の如く

の葉と耐ハ管の葉を代り用多し此檳榔毛の車ハ

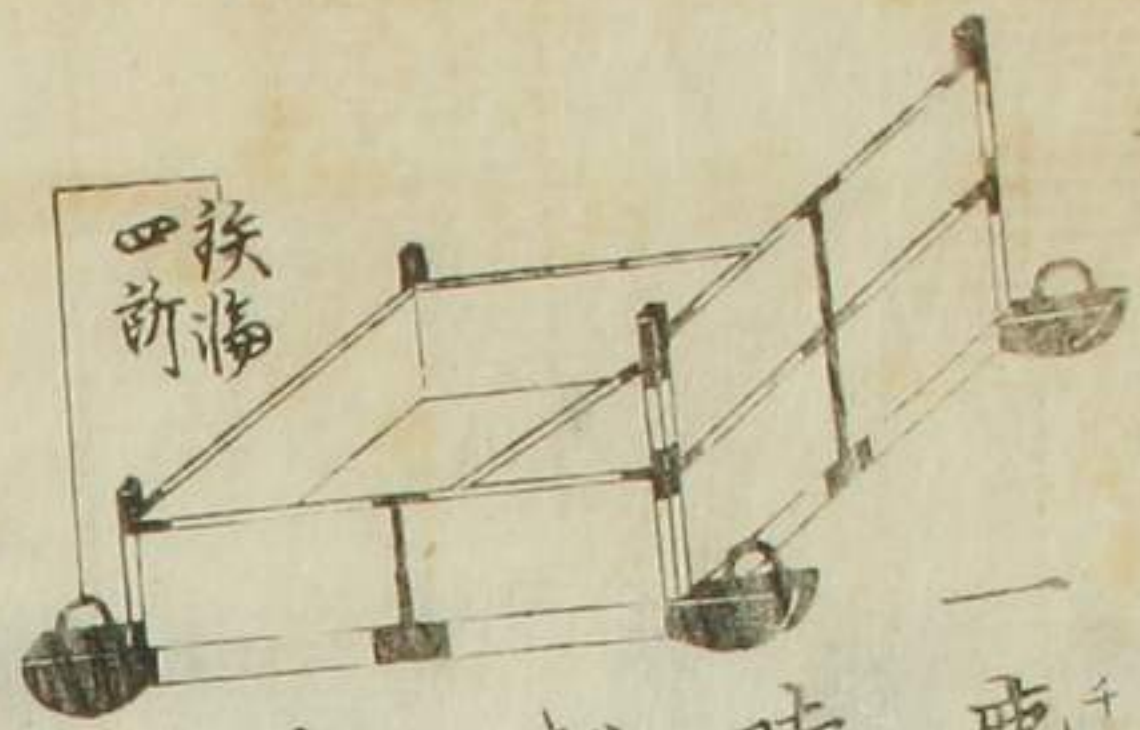
道具も定見何う一糸攝政兼良公は作の檳榔葉

極毛赤色の錦縁芳末濃下簾金銅金物榻云西宮記

青簾緑青末濃下簾金銅金物榻云西宮記云檳榔毛ハ

皇以下四位以上通用、貞文云檳榔毛ノ字ハカザル事也

塵取之圖



或人所藏之圖
ヲ以テ先大補入

也檳榔ノモト云事ニテハ無之ビリヤウ本字ハ蒲葵也古ハ此字ヲ知ラ
ガリシエハ檳榔ノ字ヲ借リ用ヒタルナリ

塵取ト云物も輿乃類也日置流法要録抄ニ輿ノ行合たる

時ノ式神弓子一打の多クもあつた

ぎぬ出ゝる輿もあつた

〜と何の又太平記卷廿九合戦ノ痛手を負ひしりける

馬ハ糸得せしと塵取ノ昇きと遠の路ノ表りける

あをだまて玉石ををこび〜

その形何をもよひあるのり

貞丈雜記卷之七

